

論 文 要 旨

申請者氏名 ス"ヒ"アツビリ・タマリ

申請学位 博士

主論文題目 グルジア語を母語とする日本語学習者に於ける長母音の習得について

—VT法による発音指導—

主論文要旨（邦文は4,000字以内
外国語は2,000語以内）

主論文要旨

1) はじめに

筆者はリズムの重要性という観点から、アンケート調査を行った。その結果、日本語のリズムの一環と考えられている特殊拍の中で、長音が一番難しいということが分かった。また長音の習得困難を明らかにしている研究もあることから、研究対象を長音にしぼった。更に、拗長音の習得困難を記述されている研究があり（中川 2000）、又筆者も行った予備調査では拗長音の長さが不十分な誤用の傾向が明らかになったため、長音並びに拗長音も研究対象とした。

日本語のリズムは、モーラ・リズムとして分類されており、各モーラ（拍）がほぼ等時に発話されるという特徴を持っている。直拍（普通拍）においては1拍が1音節であるが、特殊拍である長音や促音や撥音は2拍で1音節を形成する。この違いが、異なるリズム構造の言語を母語に持つ日本語学習者にとって、習得を困難にさせていると考えられている。

言語のリズムはストレスリズム、音節リズム、拍リズムなど分類されており、グルジア語は弱い強弱アクセントがあるため、音節リズム言語と分類している（Howard I. Aronson）。しかしストレス言語よりもっと日本語に近い音節言語のグルジア語を話す学習者には長音が容易であるとは言えない。違った母語を持つ学習者の長音問題を研究した結果、英語というストレス言語よりフランス語及びスペイン語の音節言語話者の方が長音に問題があったと述べている研究がある（皆川1996、皆川1997）。そして母語のリズム体系は長母音の知覚に影響しないという仮説を提唱された。しかしストレス言語である英語では、ストレスがあるところでは母音が伸びる事が長音の知覚に影響しているのではないかと筆者は考える。

そしてグルジア語の特徴は音を一つ一つはっきりと、そして母音を強い緊張

を伴って調音することである。伸ばす音及び二重母音がないため、長音の学習はさらに困難になっている。

世界の日本語の発音教育が不十分であることについて様々な文献に示されている。(小熊 2002) では、日本語能力が上級になっても、音声能力が低いレベルについて「日本語教育においては一般に、学習者の発話をテストする機会が少なく、音声指導があまり行われていないのが現状である。そのため、文法や語彙など他の言語能力が上級レベルになっても、音声の習得が進まない学習者も多く見られる」と示されている。

現在、グルジアで行われている発音教育の1つの問題は日本語との対照研究が成されていないため、母語との相違点を教えてない事であり、従って、悪の転移の矯正をしない事である。もう一つの問題は、単なるカセットテープの繰り返しで発音教育を行っている事である。そこで筆者は母語との相違点を研究する以外にも、特に言語教育の最初の段階で、学習者に目標言語の音を認知してもらう必要性を主張しているVT法を教育課程に入れることを考える。母語と同じレベルで自然に言語獲得ができる臨界期「11歳」(グベリナ1981)をすでに超えている学習者には、理論知識と共に、母語干渉の妨げを乗り越えて、音声を正しく聴き取るために効果的であるVT法の立場から、発音教育・矯正を行った。身体リズム運動、わらべ歌、ロガトムなどを導入することで、単調なリピートと聞き取り練習で、退屈になりがちな発音授業(佐藤雅子 2004)に遊戯性の要素が入り、リズム感が付き、日本語のリズム、イントネーションの学習効果が高まると考えられる。

日本語教師として、日本語らしい発音、正しいリズムを学習者に指導して、身につけさせるための研究としたい。

2) 研究目的

筆者はグルジアの学習者の長音問題を明らかにするために、聴解調査及び生成調査を行った。その結果、長音の拍の増加、拍の減少、拍の交賛などがみられたが、極端に誤用が多くて、又、超上級になっても治らないと小熊（2008）が述べている拍の減少を研究の対象にし、その矯正をVT法による実験教育で行った。実験前と後の調査では教育実験が効果的であったことが明らかになった。

Dickerson、L.（1975）の研究では、第二言語の音声変異について、変異をもたらす3つの要因から論じられている。それは1. 目標音の音声環境 2. 発話スタイル 3. 学習者の学習歴である。本論ではこれら1、3の要因に加え、第4の要因として学習者の母語干渉という観点からも考察を行う。グルジア語を母語とする学習者を研究の対象にすることによって、言語の普遍的な特徴及び言語の個別的な特徴を明らかにすることができるであろう。又その調査結果を考慮し、ヴェルボ・トナルメソッド（VT法）で発音矯正を行い、その効果に関して論じたい。

3) VT法による指導について

VT法は、発音の習得を言語の全体構造の枠組みで捉える視点を持つ点でユニークである。つまり、リズム、イントネーションと短音の発声に厳密な関係があると主張している指導法である。又、緊張という概念を導入し、学習者の誤用を緊張の観点から分析し、フィードバックができる指導法である。

筆者は本論文の実験授業では、身体リズム運動、歌、ログトムを使用した。

1. 身体リズム運動

身体リズム運動は身体とリズムの厳密な関係に基づく技術である。体を動かすとリズムをとるのは、自然な事である。好きな音楽を聞くときに足でリズムをとったり、オペラ歌手が大きな声を出す時、高音や低音を出す時に、手を前に出したり、上にあげたり、一步前に出たり、後ろに下がったりすることは周知の通りである。

クロード・ロベルシュ（1985）は身体リズム運動の特質を下記のように述べている。

1. 緊張を調音器官だけでなく、体全体で感じさせる。
2. 単音の持続時間、手の動きによって調節できる
3. 調音方法を部分的に手の動きによって視覚化できる。

2. 歌

ペタル・グベリナ（1981）では、リズム、ハーモニー、イントネーションがたくさんある歌によって、リズムがもっと強調され、又体ももっとリズムよく動くので、歌は発音の獲得の助けになると述べている。

更に筆者は教師という経験を通して、歌は文化の一部であり、そして遊戯性のある歌を授業に取り入れることにより、単調で退屈になりがちな発音の授業が楽しくなり、学習者の学習意欲も高まったと実感している。

VT法の技術として、歌の中で、わらべ歌は最も広く用いられている。わらべ歌リズムには、昔から歌い継がれてきた「伝承わらべ歌」と「伝承わらべ歌」で補いきれない音声要素を、最適なリズムに乗せて作成する「創作わらべうた」を活用したものがある。

3. ログトム（無意味音節）

目標音をリズムに乗せ、繰り返すことで、習得しやすくなるという考えが元にある。

例：タタタタ タタタータ

タタタタ タタター

上記のように、同じリズムパターンで、長音の後、もう一つの「タ」があるかないかによって、長・短の感覚を身につけさせることができる。

4) 結論

本稿に於いて、グルジア語を母語としている日本語初級・中級学習者の長母音の聴解・生成に於ける誤用の傾向を明らかにするために調査し、指導も行い、次のような事が明らかになった。

1. 聴解調査の結果

- 1) 表1から分かるように、誤答率は、初級・中級学習者共に、長音語中（低低・高低）、語末（低低・高高）、語頭（高低・低高）の順に高かった。
- 2) 長音が一番難しいという結果が、長音部の末部の音が低い長音語中（低低型）・長音語末（低低型）の場合に出た。長音部の末部の音が低い型が知覚されにくいという先行研究（皆川（1995a）小熊（2008））と同様の結果になった。

2. 生成調査の結果

- 1) 初級日本語学習者の単語読み上げ実験の結果、長音も拗長音も語末位置で誤答率が最も高かった。中級では誤用が減り、拗長音は語末は初級と同様誤答が多く、長音は語頭と語末が誤用が最も多く、ほぼ同じになっている。
- 2) 日本語の子音で緊張度が最も高い破裂音が急に弛緩するため、後続する母音を適切な長さで伸ばすことを妨げている。母語干渉の観点からすると、日本語

の破裂音よりも強いグルジア語の「k` t` p`」放出音が日本語学習者の長音・拗長音の生成をある程度妨げていることが考えられる。語頭は緊張度が高いため、特に語頭の影響が強いと考えられる。又、グルジア語の弱い強弱アクセントも常に語頭に置かれているため、放出音の影響を更に強めると考えられる。

3. 指導の効果（結果）

長音だけに注意を向けさせると、逆効果になってしまう恐れがあると示している研究（小熊 2008）があったため、長音指導をリズム指導、又長音の習得に影響を与えていると考えられるアクセント、破裂音等、典型的な誤用の指導と合わせて行った。

指導項目に関する理論的な知識を与え、意識化したうえ、VT 法を中心に練習を行った。わらべ歌、ログトム、身体リズム運動で目標音を際立たせ、習得を促した。

指導群、非指導群に対して、指導前及び指導後行った聴解・生成調査の結果、指導群の誤用の改善率が顕著であることが分かった。

指導群の聴解における長音の誤用が 84%、拗長音は 47, 5%減少した。非指導群の長音の聴解における誤用は若干（2%）増加し、拗長音は 15%減少した。指導群の生成における誤用は長音は 64%、拗長音は 96, 4%減少し、それに対して非指導群の長音の誤用は 27%、拗長音の誤用は 51%減少した。非指導群も誤用がある程度減少した理由は 1. 長母音の意識化（筆者は一回目の調査後、長音の誤用を指摘した）、2. 日本語能力レベルが上がると共に、発音に自然さが増すという先行研究（戸田 1998）があるためであると考えられる。

5) まとめ

本論文では、グルジア語母語話者に於ける日本語学習者の発音上の問題、即ち、聴取及び生成に於ける長母音の誤りを扱った。トビリシの 2 大学に於いて

初級学習者及び中級学習者に行った調査では、誤用の傾向が明らかになった。この調査結果に基づいて、長音指導の実験教育を行い、誤用の矯正をVT法に基づいて行った。VT法に基づく指導の効果を明らかにするため、従来のオーディオリンガルメソッドによる発音教育を行う非指導群を設けて対照した。

一か月半の指導の後、同様の音声テストを実施した結果、長音・拗長音の知覚、生成共にオーディオ・リンガルグループに比してVT法グループの改善率が顕著に上昇した事が明らかになった。

このように、グルジア人学習者の場合も、音の長さ、長音の習得が困難であり、特に語末長音、そしてピッチの観点からすると「低低型」が難しいということが分かり、言語の普遍的な特徴が改めて確認できた（皆川1997の5カ国語話者と同様の結果）（3章を参照）。又、言語の個別的な特質も現れた。グルジア語話者の日本語学習における誤りのうちに、アクセント及び破裂音の母語干渉に起因するものがあることが分かった。

聴解及び生成調査で現われた誤用に関し、日本語とグルジア語の対照分析を行い、VT法に基づく実験授業に於いて長音拍の問題が効果的に解決されることを明らかになった。そこで実験授業で使用した手法に基づいて、グルジアの日本語教育機関にシラバスの作成を提言したい。

本研究では、単語レベルで調査をし、指導も単語を中心に行った。自然発話を分析した上で、文レベルでの指導方法の開発を、今後の課題としたい。